
最後の時

いよむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の時

【Nコード】

N6700A

【作者名】

いよむ

【あらすじ】

卒業式の日。三角関係。なんかダルいかも…

付き合うきっかけは、私がまさきに告白したことだった。もうその時には好きで好きで仕方なくなってしまうていた。

まさきがあさみの事好きなのも知っていた。それでも好きだった。だからあさみだけがクラスが分かれた時まさきに告白した。まさきがあさみは振り向いてくれてないって考えてたのを知ってたから。

「あつ、あさみだ。」

まさきの目が遠くにいるあさみを捕える。どうしてあんなに遠くにいるのに気付くんだろう…。

あさみは一人で人混みから離れて立っていた。
美しい。

冬の風に吹かれてる彼女はその言葉がよくあった。

「ねえっ！あさみと写真撮ろう！」

「まだ撮るのか？」

少し困ったようにまさきが笑った。

まさきは写真が嫌いだ。そしてあさみも写真が嫌い。

それだけじゃなくて二人の考え方は似ていて、すごく気が合うそう
だ。

付き合う前二人で楽しそうに話してるのをよく見た。付き合ってから回数が減ったとはいえ、時々二人で話してるところを見る。

そんな時はすごく胸が痛くなった。本当に心臓が潰れちゃうんじゃないかって思うくらい。

まさきは多分私より、あさみの方が気が合うのだろう…。

「あさみっ！」

あさみの方にかけていく。まさきが少し後ろを歩いてついでくる。
あさみがゆっくりとこちらに振り返る。私と違って、大人っぽい綺麗な顔。まさきはこんな人が好きだった。私とは全然違う。

「写真撮ろう☆」

断られるのは分かっていたが聞いた。どうしても写真を撮りたかった。

「いーよ。二人で撮ってあげるよ？」

やはりあさみは写真を嫌がった。二人で撮ると言われたが、私はあさみと写真を撮りたかった。

じゃないとあさみとの思い出が消えてしまいそうだったから。

あさみと撮ろうとただこねている時、他の友達に名前を呼ばれた。やった！

心の中で言った。

「ごめんね！ちょっと待ってて！」

本当は呼ばれる前から、どこかに行くつもりだった。この二人だけにしなきゃいけないと思っていた。

それは罪悪感からくるもの。

本当はあさみがまさきのことを好きってことも知っていた。

二人が実は両思いなのを知っていて、それでまさきに告白した。あさみが離れた時を選んで。

情けないと思う。正面きって戦えばよかったとも。

付き合った後もまさきはあさみを見ているように感じた。そんな二人の距離を私は離してしまったのだと、後悔が消えたことはなかった。

でもまさきが好きで、好きで仕方がなくて…

今の今まで二人が話し合うのが怖かった。

でもダメだよね…。

今を逃せば、あさみは違う大学に行く。

もしかしたら、私はフラれるかもしれない。

それは仕方ないこと…。

私はまさきだけでなく、あさみも失えなかった。

この機会がないと、3人はもう終わりの気がした。

それなら、まさきにふられても：

目の奥がつんとした。今泣いても卒業式の別れを惜しんでいるように見えるから便利でいい。

友達と会話をしながら、二人の方を見る。

静かに語り合っていた。顔は合わしていない。

ズキン：

もう現実を受けとめるしか私にはできないのだから。

友達と写真を取りあう。写真はずっとそのままに残るから、私は好きだ。

写真の中ではその撮った時のままだ。友情も笑顔も時間も。

だから3人で写真を撮りたかった。一人でも欠けたらいけないかった。私はズルをしたのだから、その尻拭いは私がしなきゃいけない。

カメラのレンズ越しに二人を再び見る。もう終わったのだろうか？ シャッターはまだ押さない。

友達に別れをつげ二人の方にかけて行く。

「あさみ？泣いてるの？」

あさみの目は赤かった。どっちなんだろう…。分からないが私も辛くなってきた。

「寂しくてさ…。」

「じゃあ、なおさら3人で写真撮ろう！！」

次はあさみも写真に写ってくれた。3人の写真。この写真では私達は3人一緒に、ずっと今の関係でいられる。

写真みたいにこのまま3人でいれそうだ。なんとなくだが、そう思えた。

「あさみ…大学違う所だね…。」

あさみと別れた後も、彼女がいたという空気は残っていた。

3人ですごした高校生活が終わってしまう。

…寂しい…。

目の前がぼやけた。

ホロリと涙が伝う。

「そうだな…。」

「あのさ…、まさきってあさみの事…。」

まさきが黙って私の手を握る。

それがあまりに力強くて、私の不安が伝わってしまうんじゃないかと心配になる。

まさきが好きだ。

愛してる。

やっぱりあさみにとられたくない。

そんな思いが溢れて、胸がパンクしてしまいそうだ。

「俺、やっぱりみかが好きだ。どうしようもなく好き。」

もう溢れる涙は止められ無かった。

息もできないくらい、涙と鼻水が溢れる。

「まさき…、好きだよ…。」

「うん。」

「好き…。」

「うん。」

「大好き。」

「…うん。」

まさきの顔が近づく。

唇と唇が触れ合うだけの優しいキス。

愛してるその気持に潰されそうだった。

後で二人でも写真を撮ろう。

卒業式終了のチャイムが鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700a/>

最後の時

2010年10月10日23時40分発行